国立歴史民俗博物館研究報告　第83集　2000年3月

出雲平野における弥生文化の成立過程

弥生Ⅰ期突帯文系土器がかたる農耕民化

The Formation of the Yayoi Culture in Izumo Plain

藤尾慎一郎

はじめに
❶蔵小路西遺跡の突帯文系土器
❷出雲平野の突帯文・突帯文系土器編年
❸西日本の突帯文系土器
❹出雲平野における弥生文化成立期の諸問題
❺結　語
おわりに

[論文要旨]

西日本の弥生早期は突帯文土器，Ⅰ期は板付・遠賀川系土器を標識土器としている。突帯文土器は，Ⅰ期以降も突帯文系土器として一部の地域で使われ続けるが，出雲ではどのようなあり方を示すのかこれまであまり知られていなかった。今回，出雲市蔵小路西遺跡で見つかった突帯文系土器は遠賀川系土器と伴出しないなど，この問題を考えるうえで貴重な材料を提供することとなった。そこで遺跡から出土する突帯文系土器と遠賀川系土器との出方を手がかりに，この地の弥生文化がどのようにして成立したかという問題について考察した。

出雲の突帯文系土器には，在来の早期突帯文土器に系譜をもつ在来系，早期突帯文土器が遠賀川系土器の影響を受けて成立した変容系，瀬戸内や豊後との関係が強い外来系が認められた。そこで遺跡ごとに三者の保有状況を調べたところ，水稲農耕を中心とする生活への転換過程と深い関係にあることがわかった。

すべての突帯文系土器と遠賀川系土器が出土し，縄文時代から数千年にわたって存続し，縄文以来の本拠地で弥生Ⅰ期前葉（板付Ⅰ新式期）に稲作を中心とする生活（弥生化）に転換するタテチョウ遺跡や西川津遺跡。変容系を除く突帯文系土器と遠賀川系土器が出土し，縄文以来の本拠地がある同じ領域内で弥生Ⅰ期後半に弥生化する北講武氏元遺跡。在来系だけが出土し、弥生化することなく集落が廃絶する蔵小路西遺跡に代表される。

縄文以来の本拠地に占地したまま弥生化する例は今のところ出雲だけでみることができる。福岡県板付，岡山県津島南池，高知県田村遺跡はいずれも，それまで在来の人びとが本拠地としていなかった場所に出現するからである。したがってタテチョウや西川津の弥生化は，弥生文化が伝播した地域において縄文以来の中核となる集団がもっとも早く，急速に転換した好例と考えられる。

はじめに

本稿は，出雲市蔵小路西遺跡から出土した突帯文系土器[1]の時間的位置づけと，派生する問題について論じたものである。突帯文系土器は，弥生早期突帯文土器の流れをくむ甕のことで弥生Ⅰ期に属する。出雲平野でも松江市西川津遺跡やタテチョウ遺跡で遠賀川系土器にともなって出土することが知られていた。

今回，蔵小路西遺跡でみつかった突帯文系土器には，遠賀川系土器が伴っていなかった。器面調整や器形に早期突帯文土器よりも新しい特徴が認められ，しかも松江市タテチョウ遺跡や西川津遺跡の突帯文系土器の特徴と共通するにもかかわらず，遠賀川系土器が伴わない理由には二つが考えられる。一つはⅠ期に属するものの遠賀川系土器より古い可能性，もう一つは遠賀川系土器と同時期だがこの遺跡では伴わなかった可能性である。

そこで，本稿では，出雲平野の突帯文系土器編年の中に蔵小路西遺跡から出土した土器を位置づけ，時期差なのかどうか検討する。最後に，突帯文系土器がかたる出雲平野，および西日本における弥生文化成立期の諸問題について考える。

❶……蔵小路西遺跡の突帯文系土器（図1）

蔵小路西遺跡から出土したのは突帯文系の甕と鉢である。甕には屈曲せず単純に底部にむかってすぼまる体部に，直口する口縁部をもち，口縁部外面に突帯を貼りつける砲弾型一条甕（2・3）[2]と，屈曲する体部に直口したり外反する口縁部をもち，突帯を口縁部外面に貼りつけた屈曲型一条甕（1）がある。それぞれ次のような特徴をもつ。

器形　屈曲型一条甕（1）の体部は強く屈曲し，胴部最大径が屈曲部にある点から，早期の西部瀬戸内型［藤尾 1991a］の屈曲甕に相当する。

口縁部突帯の位置　砲弾型一条甕は口縁端から下がった位置に貼りつけるもの（A），屈曲型一条甕は口縁端に接して貼りつけるもの（C）である。2の突帯は，幅が広く高さもある点が早期突帯文土器とは異なる。

刻目　砲弾型一条甕に刻目はないが，屈曲型一条甕にはヘラ状工具で中ぶりの刻目がつけられている。

器面調整　ヘラ状工具によるケズリ，もしくは粗いヘラナデで，貝殻条痕も一部みられる。刷毛目はみられない。調整の方向は，体部下半が右下がりの斜め方向，体部上半が横方向で，縄文土器にみられる条痕調整と同じ手法が用いられている。

色調　すべて暗黄褐色で，九州北部，弥生Ⅰ期の土器に通有な色調である。

その他　砲弾型一条甕（3）の口唇部をつまみ出すようにしてナデるために先端が細く外反している。粘土帯はすべて内傾接合で積み重ねられている。

以上のような特徴をもつ突帯文系土器は，出雲平野の突帯文系土器のなかでどのような時期に位置づけられるのだろうか。

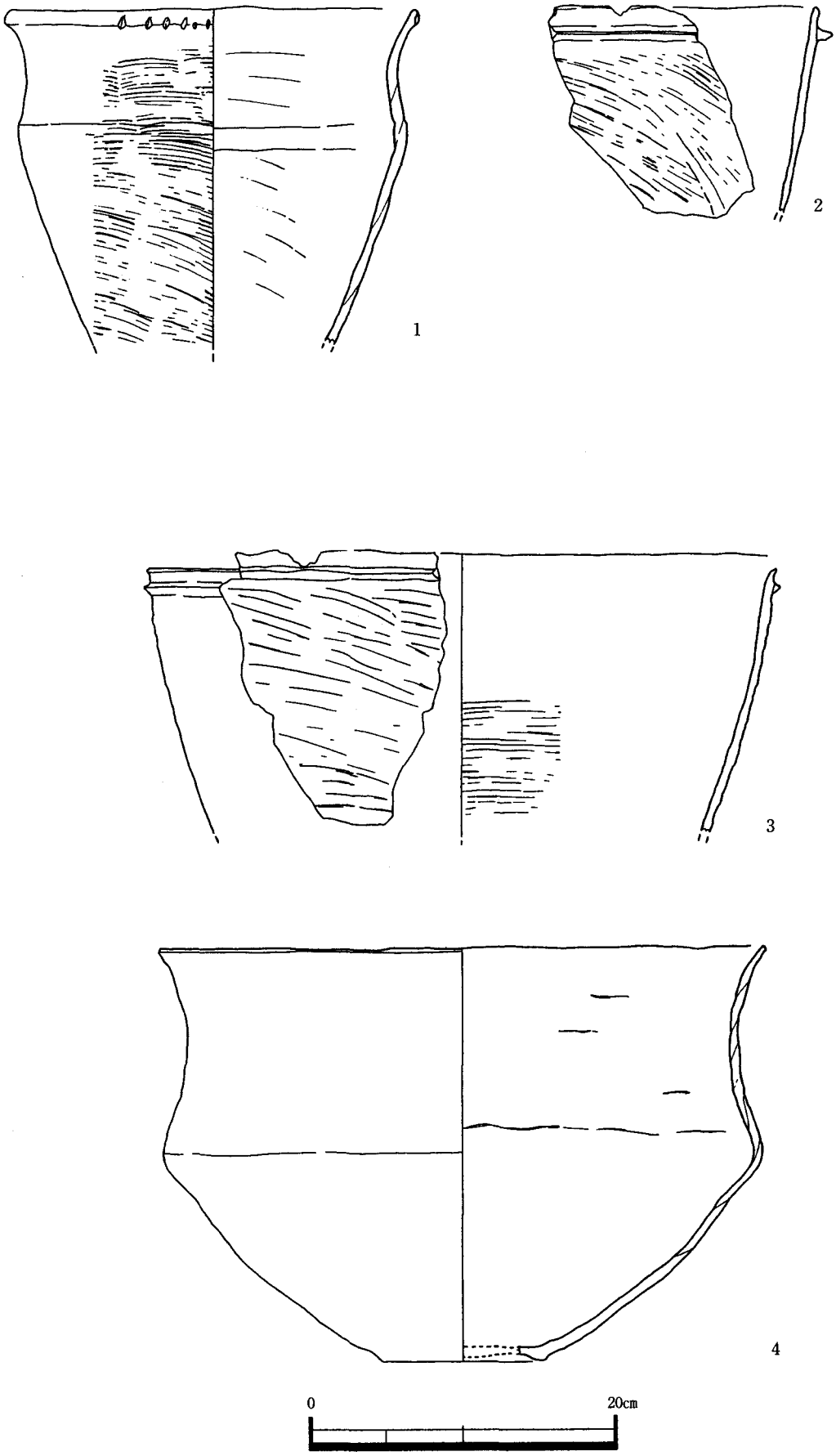

図１　蔵小路西遺跡出土土器実測図（縮尺１：４）

❷……出雲平野の突帯文・突帯文系土器編年

出雲平野に所在する出雲市三田谷Ⅰ遺跡，鹿島町北講武氏元遺跡，松江市タテチョウ遺跡，同西川津遺跡から出土した突帯文・突帯文系土器の編年をおこなう。まず，それぞれの遺跡から出土した土器の特徴を説明する。

1　鹿島町北講武氏元遺跡（図2）［赤澤編 1989］

東区の溝の中層から，削りだし突帯をもつ弥生Ⅰ期中段階の遠賀川系土器（9・10），下層からは形骸化した段をもつ遠賀川系の壺や甕と混在した状態で突帯文系土器が出土している。調査者の赤澤秀則はこれらの土器を「晩期突帯文系土器」とよぶ。筆者の呼び方になおすと早期突帯文系土器となる。

突帯文系甕には砲弾型一条甕（2・4・8）と屈曲型一条甕（1・7）の二つがある。いわゆる二条甕はみられない。3・5・6の器形は細片のためどちらなのか特定できない。注目されるのは7である。屈曲部がこれほど下位にある屈曲型一条甕はほかにみられず，砲弾型と見間違うほどである。法量も大きい。口唇部は内面にヘラ等による強いヨコナデを加えるため，先細りで外反気味になる。この屈曲型一条甕は今のところ出雲平野でしかみられない。

蔵小路西の突帯文系甕との違いは，口縁部突帯の位置と器面調整に認められる。蔵小路西の砲弾型一条甕の口縁部突帯の位置はAだったが，北講武氏元では口縁端部からわずかに下がった位置に貼りつけるBや，口縁端部に接するCが多い。器面調整は一次調整痕をナデ消して，ヘラナデで仕上げるものが目立つ。8は，条痕調整であるにもかかわらず口縁部の突帯は，すでにⅠ期中段階以降に一般的な平坦口縁の域に達しており，広島県中山貝塚などで出土する古式の瀬戸内甕（逆L字口縁甕）と共通している[(3)]。したがって，北講武氏元の方が蔵小路西より型式学的に新しい傾向をもつ。

北講武氏元の突帯文系土器の時間的位置づけにはこれまで二つの意見がある。調査者の赤澤は下層におけるⅠ期前半に比定した遠賀川系土器と突帯文系土器の共伴には慎重な姿勢をみせ，同時使用の可能性について保留している。中・下層とも瀬戸内甕が出土していることからわかるように，一括性を認められないのが理由であろう。

これに対して，柳浦俊一や松本岩雄は共伴の可能性が高いとして，同時使用を認め，Ⅰ期中段階に併行する突帯文系土器とみる［柳浦1994[(4)]］・［松本1992］。

本遺跡の遠賀川系土器にみられる口縁部や肩部の段は，いずれも形骸化が進んでいて，削りだし状の段やヘラ描き沈線をもち，器形からもⅠ期前葉には収まりがたく，中頃から後半に比定されると考える。

赤澤がこれらの土器を「晩期突帯文系土器」と呼んでいることから推測すれば，突帯文系土器と遠賀川系土器を時間差とみていることは明らかで，早期突帯文土器の枠内で考えていることがわかる。一方，柳浦は，北講武氏元の突帯文系土器は早期突帯文土器が遠賀川系土器の影響を受けて成立したものと理解する。早期突帯文土器の最終末に位置づけ早期突帯文土器が中段階まで存続する

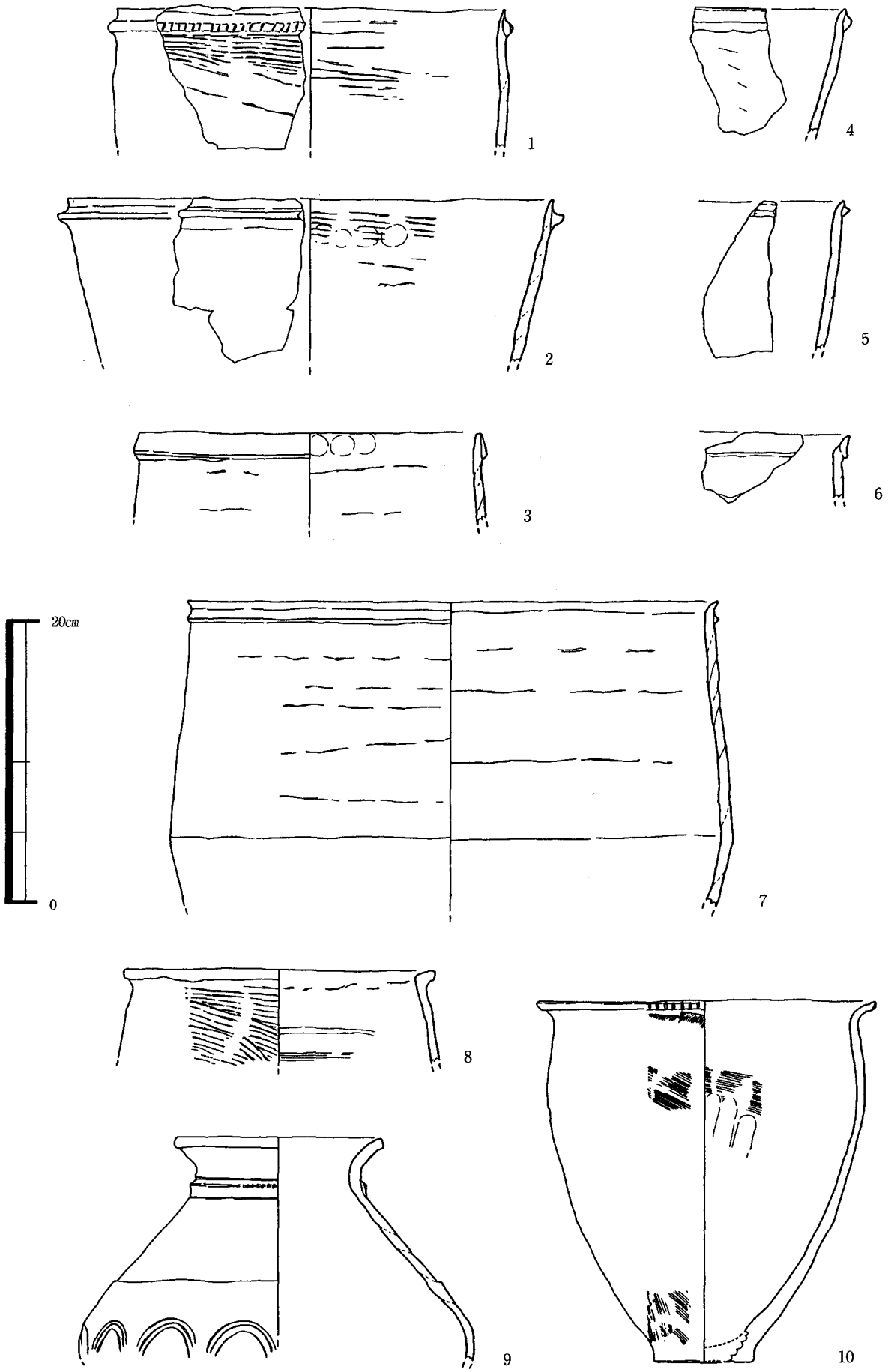

図２　北講武氏元遺跡出土土器実測図（縮尺1：4）

とみていることがわかる。[5]

このように，早期突帯文系土器の最終末に位置づける点は両者共通しているが，下限についてはⅠ期中段階説と，それ以前の二説あることがわかる。

ここでは蔵小路西より新しい傾向をもつ突帯文系土器が，中段階まで存続する可能性があること，これらの土器には刷毛目や外傾接合など遠賀川系土器がもつ手法がまったくみられないことを確認しておく。

2 松江市タテチョウ遺跡（図3）［柳浦 1990］

87・88年度調査区の4～6層から，突帯文・突帯文系土器（1～10）と，遠賀川系甕（11～14）が，縄文早期から晩期までの土器，弥生土器，古墳時代の土師器などと混在して出土した。もっとも量が多かったのが突帯文土器と報告されている。

報告書では，包含層出土の突帯文土器を，早期突帯文土器の前池式相当，突帯文土器のなかでももっとも新しいもの（報告書分類Ⅱ5），刷毛目をもつ突帯文土器の三つに分けている。本稿ではこれを参考に，四つに分けた。

まず口唇部と突帯上に刻目をもち，貝殻条痕調整を施すものは，報告書の早期突帯文土器に相当する。屈曲型一条甕（1）と，砲弾型一条甕（3）がある。

次にヘラナデ，粗いヘラ調整で仕上げ，刻目をもたない2・4・5で，報告書ではもっとも新しい突帯文土器と分類されたものにあたる。砲弾型一条甕（4・6）があり，蔵小路西と同じ特徴をもつ。

三つめは刷毛目調整をもつ7・8で，突帯上に刻目をもつ。報告書で刷毛目をもつと分類されたものにあたる。屈曲型一条甕（7）と，砲弾型一条甕（8）がある。高知県田村遺跡（図7）や岡山市津島遺跡南池地点（図7）と同じ特徴をもつ。

四つめは砲弾型の体部をもち，口縁から下がった位置に突帯文土器を貼り付け刻目を施文するものである（9・10）。豊前・豊後の下城式甕に類似する。

3 松江市西川津遺跡（図4・5）［内田編 1990］

タテチョウ遺跡と同じく早期突帯文土器（1～4）と突帯文系土器（5～9）が，遠賀川系土器（図4-10～12，図5-1，4～8）と混在して包含層下部から出土している。突帯文系土器の組成はタテチョウ遺跡と同じで，屈曲型一条甕（図4-5・6・9）と砲弾型一条甕（図5-8），特定できない図5-7がある。本遺跡の突帯文系土器に遠賀川系土器の影響を受けた土器はなく，中心は北講武氏元で主体となるものやタテチョウ分類のⅡ5と同じグループに属すると考えられる。図4-12は遠賀川系土器だが，条痕調整と同じく横方向の刷毛目調整をもつ点で，遠賀川系土器の出現期に位置づけられよう。また図5-3は図3-7が型式変化した突帯文系土器と考えられる。

全体の一部しかみていないが，タテチョウ遺跡に比べると遠賀川系土器に混在する突帯文系土器の割合はやや少ないという印象をもった。

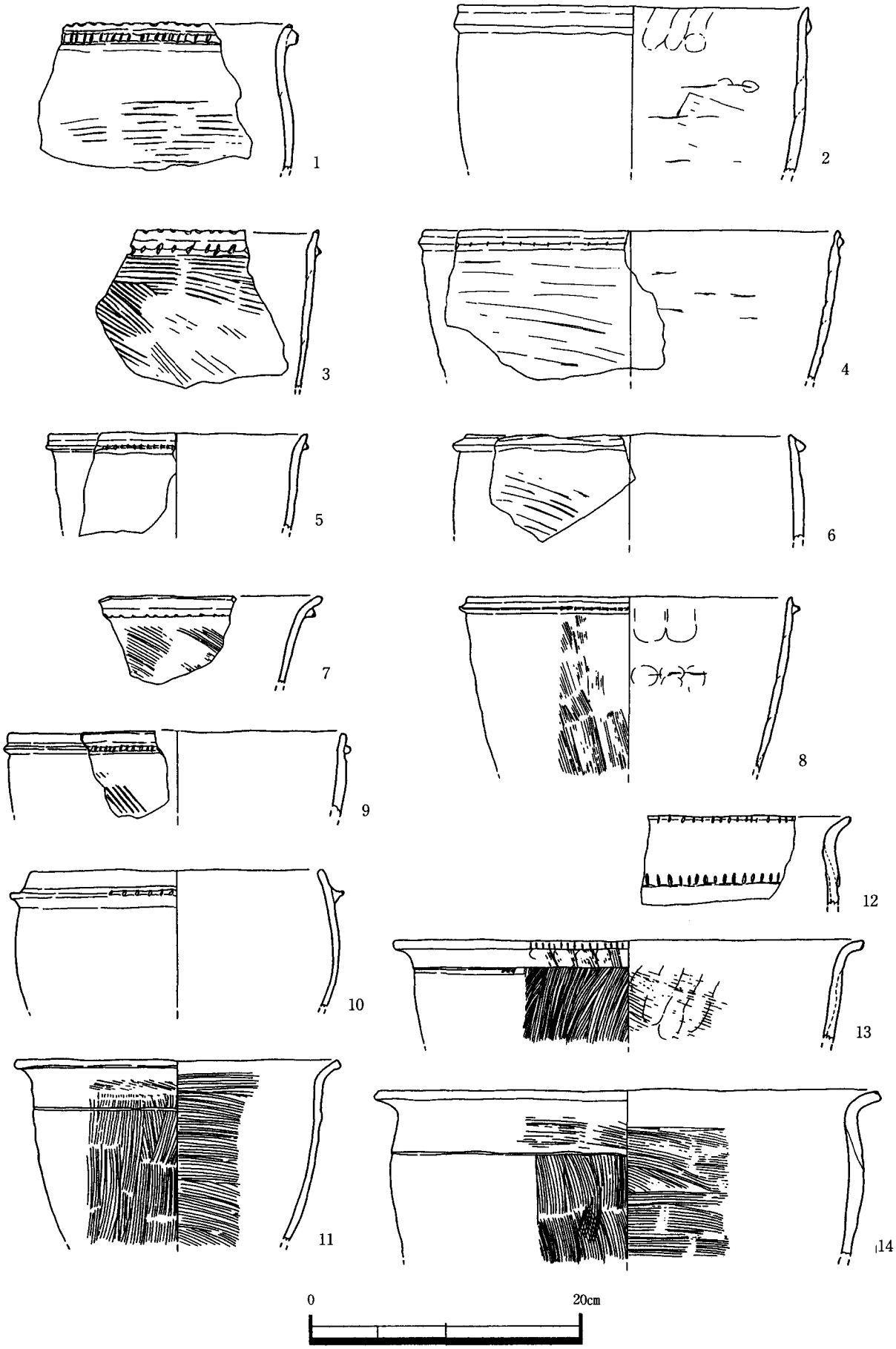

図3　タテチョウ遺跡出土土器実測図（縮尺1：4）

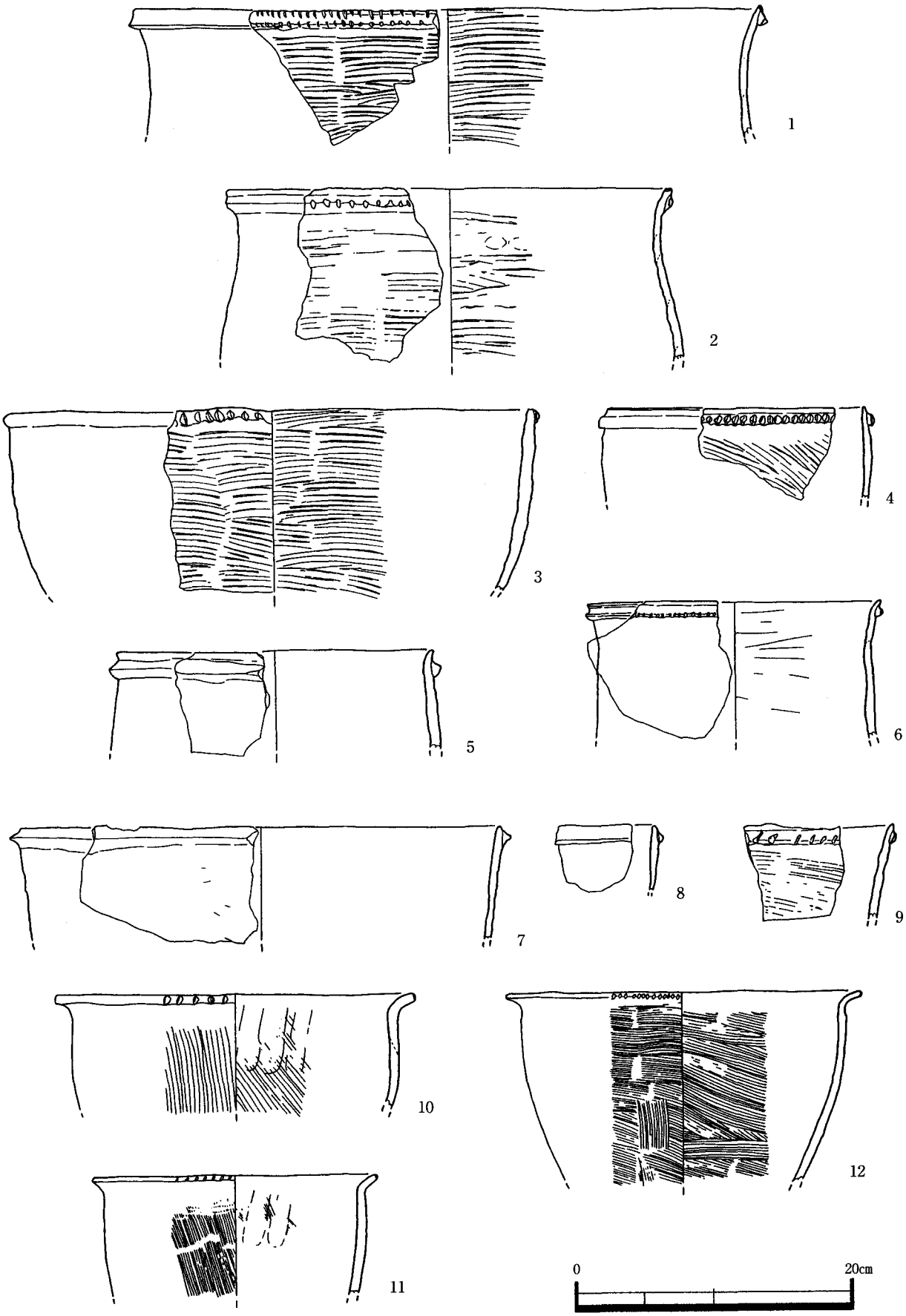

図４　西川津遺跡出土土器実測図１（縮尺１：４）

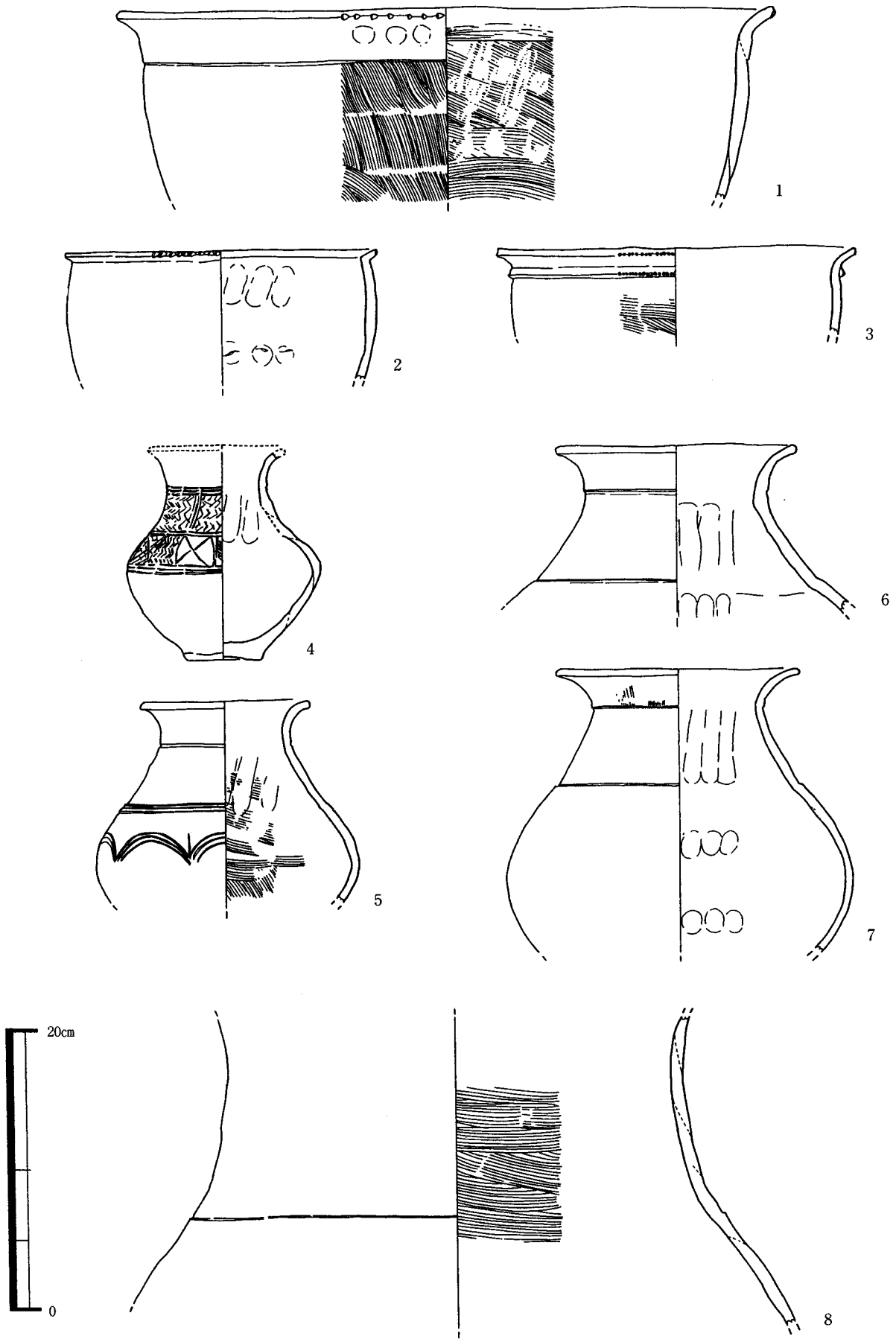

図５　西川津遺跡出土土器実測図２（縮尺１：４）

4　出雲平野の突帯文系土器の特徴（図6）

出雲平野の突帯文系土器には，蔵小路西にみられるもの，蔵小路西より新しい傾向をもつ北講武氏元にみられるもの，田村や津島と同じく遠賀川系土器の刷毛目技法をもつもの，下城式甕や中山Ⅱ式と同じ瀬戸内甕などの四つがあった。瀬戸内甕や下城式甕などの外来系をのぞくと屈曲型一条甕と砲弾型一条甕の組み合わせで，いわゆる二条甕がほとんどない点で共通する。次にこれら四つが地理的・時間的なまとまりをもっているのかどうか検証する。

第一群は，タテチョウ遺跡でもっとも新しいとされた突帯文系土器で，蔵小路西，タテチョウ，西川津で出土している（図6－8・9・11・12)。屈曲形一条甕（12）と，砲弾型一条甕（8・9・11）がある。いずれも口縁端部から突帯幅一つ分ほど下がったところに突帯を貼りつけるものである。

屈曲型には小振りでしっかりした刻目がつくが（12)，砲弾型は無刻か小振りで浅い刻目がつく。口唇部はヨコナデで先細りに仕上げる。体部にはヘラ状工具による削り，もしくは雑なヘラナデを施す。条痕調整はみられない。

12は口頸部の傾きからみて体部に屈曲の痕跡を残していると考えられる。

なお一群が出土した遺跡のなかで，蔵小路西だけ遠賀川系土器が伴出しない。

第二群は，タテチョウ遺跡だけにみられる突帯文系土器で，早期突帯文土器が遠賀川系土器の影響をうけて成立したものである（14～17，21)。屈曲型一条甕（14・15）と砲弾型一条甕（16・17）がある。

遠賀川系甕と同じ刷毛目調整で仕上げるものとナデ調整で仕上げるものがある。刷毛の使い方は遠賀川系甕と同じく縦方向につける17と，条痕調整と同じく横方向につける14がある。遠賀川系甕と同じ外傾接合をもつものは確認できなかったが，内傾接合の場合でも粘土帯の幅は早期突帯文土器よりも明らかに幅広になっているので，遠賀川系甕の製作技法の影響を受けていることは確実である。

口縁部の突帯は，口縁端部から下がった位置に貼りつけるもの（14・16）と，わずかに下がった位置に貼りつけるもの（15・17）など，さまざまである。刻目はヘラ調整や刷毛目調整用の工具によって刻まれ，小振りで定型化している。古・中段階の遠賀川系土器と混在して出土する。

第三群が北講武氏元遺跡やタテチョウ遺跡で出土した突帯文系土器である（図6－10・13)。ナデ調整で仕上げる。口縁部の突帯は，口縁端部から下がった位置に貼りつけ，刻目はつけない（無刻目突帯)。口唇部をヘラ状工具によって先細り気味に仕上げるのは，第一群と同じである。図示はしていないが，垂下した突帯を付加する土器が現れるのもこの時期である。柳浦がいうような突帯文土器最終末の様相を見せる。13は，先述したように出雲でしかみられない屈曲型一条甕である。中段階の遠賀川系土器に伴出する。

第四群はタテチョウ，北講武氏元，西川津遺跡で出土したもので三つに細別できる。一つは口縁部の突帯がすでに平坦口縁の域に達し，いわゆる中段階の瀬戸内甕に近似するもの（19・20)，二つ目は口縁部の突帯を口縁端部から極端に下がった位置に貼りつける東部九州の下城式甕に近似するもの（21・22)，三つ目は14から型式変化した屈曲型一条甕系の18である。ナデ調整で仕上げ，

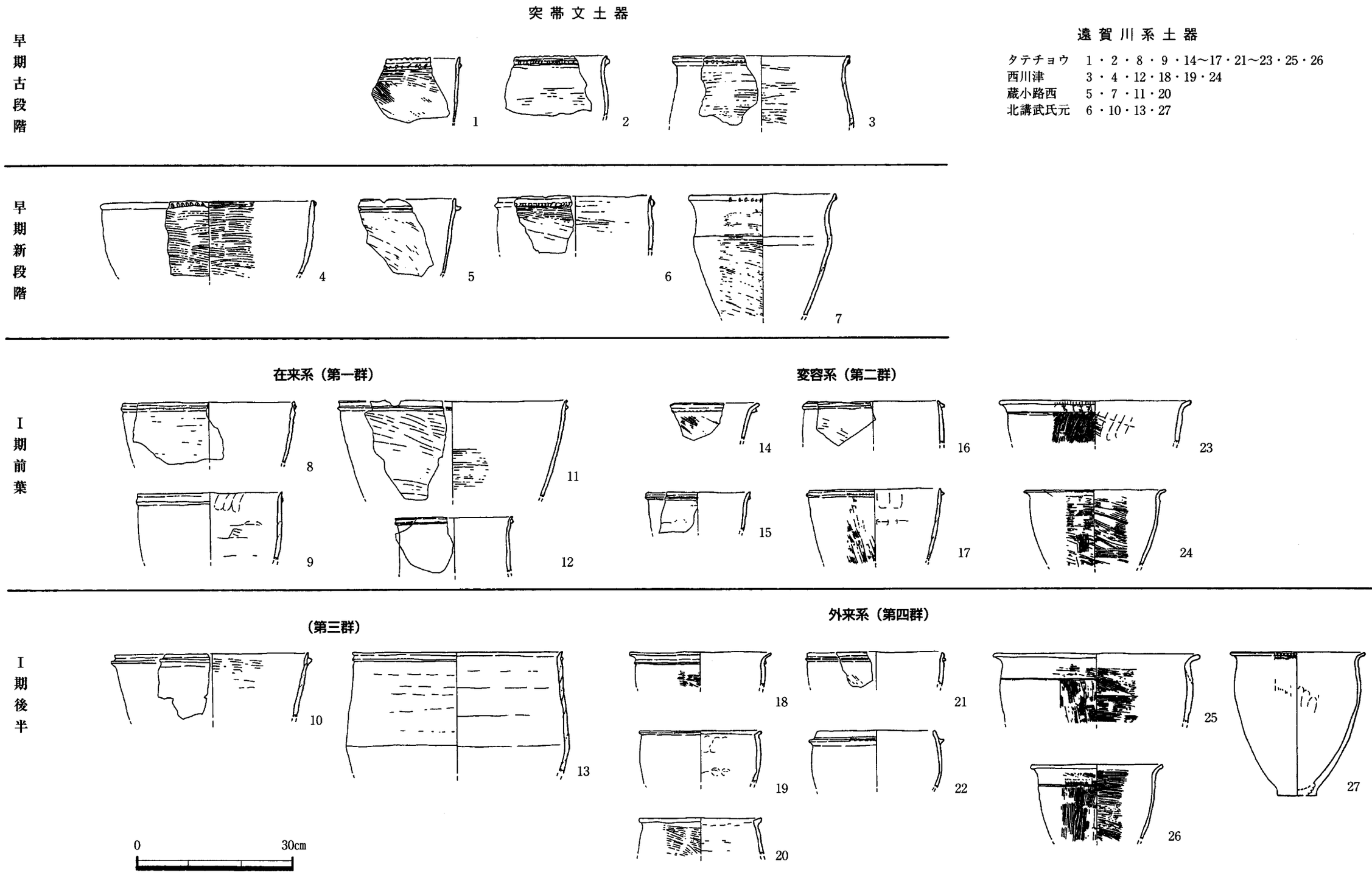

図6　出雲の突帯文土器編年図

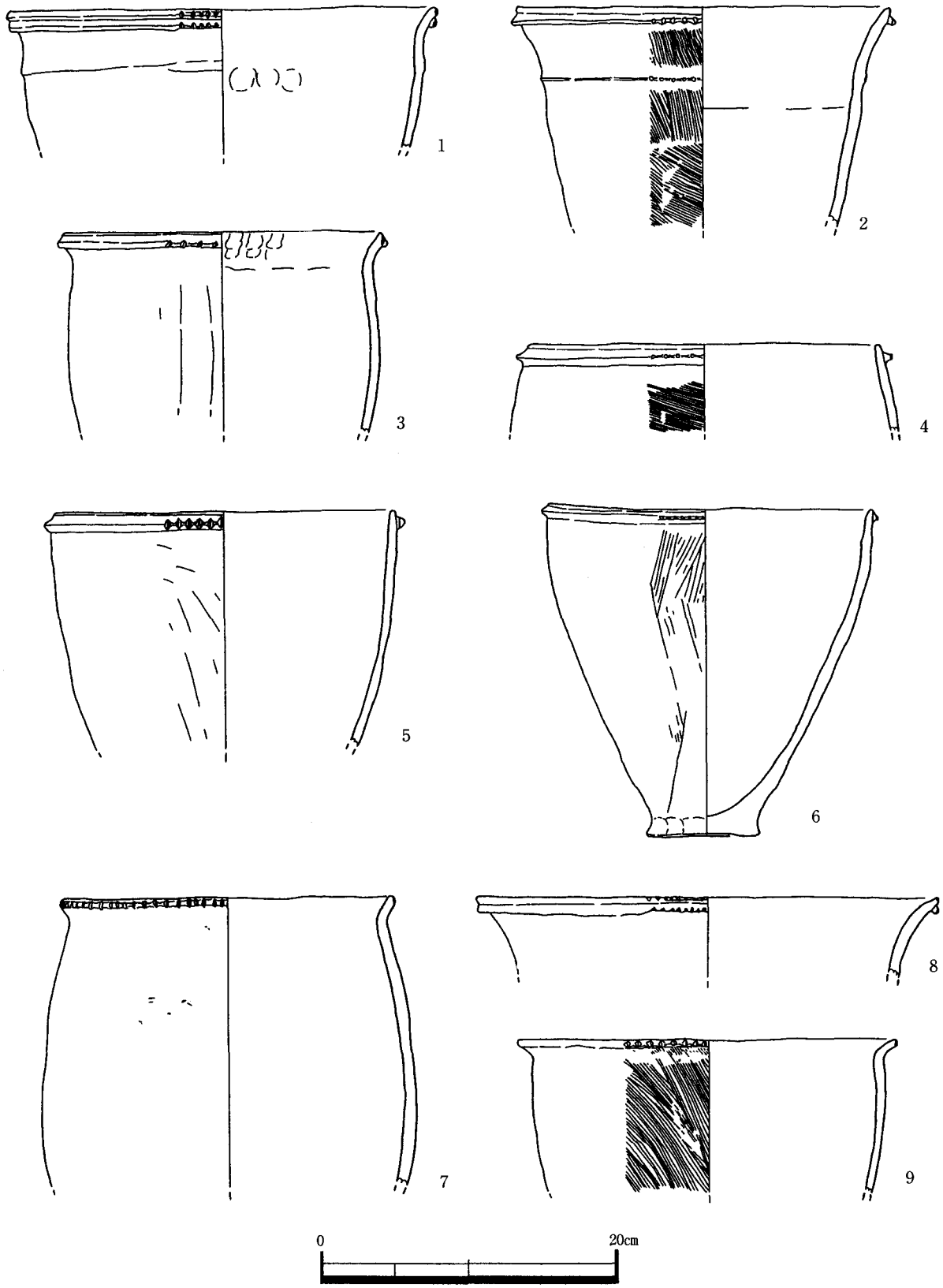

図7　南国市田村遺跡（1～6），岡山市津島遺跡（7～9）出土土器実測図（縮尺1：4）

表1　遺跡ごとの突帯文系土器，遠賀川系土器の伴出状況

	蔵小路西	タテチョウ	西　川　津	北講武氏元
早期突帯文土器	○	○	○	×
第　一　群	○	○	○	×
第　二　群	×	○	×	×
第　三　群	×	○	×	○
第　四　群	×	○	○	○
遠賀川系古段階	×	○	○	×
遠賀川系中段階	×	○	○	○

刻目は定型化した小振りである。

出雲平野の瀬戸内甕は，瀬戸内の瀬戸内甕のようにヘラ描沈線をもたず，甕組成に占める割合も1割以下と非常に少ないのが特徴である。古・中段階の遠賀川系甕と混在して出土する。これらの伴出状況をまとめると表1のようになる。

以上，各群の型式学的特徴や他地域の突帯文系土器との共通性をふまえて，一～四群の新旧関係と時間的位置づけをおこなう。

まず他地域との関連がとらえられない，出雲に特徴的な，在来色の強い群である一群と三群から検討する。口縁部突帯の貼り付け位置や器面調整などから三群の方が新しい傾向をもつことは先に指摘しておいたので一群→三群という先後関係をまずおさえておく。これらは出雲に特徴的な器形をもつ図6-13を含むことなど総合的に判断して，在来系の突帯文系土器と考えられる。

次に二群と四群は，他地域では明らかに時間差をもつ状態で出土している。二群は，Ⅰ期前葉の田村Ⅰ式や津島Ⅰ式と型式学的な共通性をもつ。刷毛目技法の採用などにみられるように，西日本の各地で出現する遠賀川系土器の影響を受けて早期突帯文土器が変化し，成立した変容系の突帯文系土器である。したがってⅠ期の前葉に位置づけられる。

第四群はⅠ期後半（中段階）の瀬戸内甕や下城式甕の古いところと同じ型式学的特徴をもつので，Ⅰ期後半に位置づけられる外来系の突帯文系土器である。

最後に変容系と外来系との併行関係，および遠賀川系土器の伴出状況をもとに在来系突帯文系土器の時期を比定する。

一群の上限は，条痕調整をおこなわず，刻目も形骸化している点からみて早期突帯文土器より確実に新しい。しかし図6-7のような屈曲型一条甕と伴出しているため，早期突帯文土器にきわめて近い時期に位置づけられる。

Ⅰ期後半の遠賀川系土器に混在して三群が出土する北講武氏元では，一群が出土していない。したがって下限はⅠ期後半までは下らない。三群とも時期差をもつと考えられる。一群はほぼⅠ期前葉に収まると考える。

一群より後出する三群は，タテチョウと北講武氏元で出土している。Ⅰ期前葉に収まる第一群より新しく，Ⅰ期後半の遠賀川系土器と混在して出土していることを根拠に，Ⅰ期後半に併行すると考える。

以上，検討した一群から四群までの突帯文系土器の時期的変遷と共存関係を整理すると次のよう

表2　出雲平野におけるⅠ期突帯文系土器

	在来系	変容系	外来系
Ⅰ期前葉	第一群	第二群	×
Ⅰ期後半	第三群	×	第四群
Ⅰ期末	×	×	わずかに存在

になる（表2）。

❸……西日本の突帯文系土器

1　突帯文系土器の研究史

岡山，河内，大和など西日本のⅠ期甕組成は，遠賀川系甕単純という認識が一般的で，例外的にⅠ期後半～末に比定される九州の亀ノ甲式や伊予の阿方・片山式など弥生文化の周辺地域に分布する土器が，晩期突帯文土器の系譜を引く可能性があると指摘されていた。これらの突帯文系土器が玄界灘沿岸地域や近畿など弥生文化の中心地ではなく，周辺地域にみられることについては縄文的な要素が残存したと考えられていたのである。

1980年代に入ると，有明海沿岸地域，四国，和歌山などで，早期突帯文土器とⅠ期後半の突帯文系土器とをつなぐⅠ期の古い段階の突帯文系土器が相次いで発見されるようになり，これらの突帯文系土器が早期突帯文土器の系譜を引くことが確定する［藤尾 1990・1991a］。なかでも河内の長原遺跡で中段階に併行する突帯文系土器が見つかったことは，弥生文化の中心，周辺を問わず，突帯文系土器が西日本全般に存在するという認識を新たなものにしたのである。

Ⅰ期の古い段階においては，突帯文系土器が甕組成に対して占める割合も5％以下ときわめて低かったが，中段階になると比率も確実に増え始める。新段階には突帯文系土器の割合が遠賀川系甕の割合より多くなり，組成比が逆転する遺跡も中部瀬戸内でみられるようになる。やがて突帯文系甕は遠賀川系甕と融合し，九州北部の城ノ越式，高知の土佐型甕，奈良の大和型甕などのⅡ期土器様式の甕を創りだしていくのである［藤尾 1991a］。

このような西日本における突帯文系土器の展開のなかで，出雲平野の突帯文系土器は古・中段階の遠賀川系土器に混在して出土することが知られていたが，厳密な共伴関係がわかる遺跡が見つからなかったこともあって，早期突帯文土器から突帯文系土器への変遷や，Ⅰ期甕組成にしめる突帯文系土器の割合など不明な点が多かった。今日，蔵小路西遺跡の調査によって先述したような変遷と遺跡でのあり方がわかるようになったのである。

2　出雲平野出土の突帯文系土器の位置づけ（図6，表2）

前の章で出雲平野の突帯文系土器には，早期突帯文土器の流れをくむ在来系，遠賀川系土器の影響を強く受けて成立する変容系，瀬戸内中部や豊後などの影響を受けた外来系の突帯文系土器が存在したことを述べ，在来系は早期突帯文土器→第一群→第三群と変遷することを指摘した。弥生Ⅰ

期になると外来系の第四群と変容系の第二群が加わった（図6）。編年図をみながら出雲平野の突帯文土器編年を説明する。

出雲平野の突帯文土器は，瀬戸内の弥生早期古段階に位置づけられている前池式と同じ時期に成立する（図6）。

(1) 弥生早期古段階

甕，浅鉢，鉢からなる。屈曲型一条甕は明瞭な屈曲部をもたずS字状に湾曲する器形をもつ（2, 3）。口唇部に刻目をもつ2と，もたない3がある。砲弾型一条甕は出雲に特徴的な器形をもつ（1）。口唇部に直接刻目をもち，口縁端部から下がった位置に突帯を貼りつける5・10へと変化する可能性がある。器面調整は貝殻条痕である。九州北部の山の寺，夜臼Ⅰ，瀬戸内の前池，岡大，南溝手下層式に併行する。

(2) 弥生早期新段階

三田谷Ⅰ遺跡出土の夜臼Ⅱ式壺（未報告）や西川津遺跡出土の砲弾型一条甕（4）など九州北部夜臼式の影響を受けた土器が出現する。その反面，二条甕を基本的に受け入れないなど瀬戸内とは異なる対応もみせる。九州系の土器出現の背景には，瀬戸内と同じ時期に九州北部の早期水田農耕情報が出雲へ波及したことをあげることができる。松江市石台遺跡で早期突帯文土器に伴って炭化米，打製石斧，石製除草具が出土している。除草具の刃部には著しい光沢がみられることから，イネ科植物の栽培がおこなわれていたと考えられている［内田 1996］。

しかしこの時期の変化は弥生Ⅰ期にみられるような大陸系磨製石器や木製農工具の出現，壺形土器の増加などの大きな変化をともなうものではない。したがって，この段階の稲作は瀬戸内と同じく補助的なものだったと考えられる。九州北部の夜臼Ⅱa・Ⅱb，板付Ⅰ古式，瀬戸内の沢田式に併行する。

(3) 弥生Ⅰ期前葉

遠賀川系土器が出現する時期である。突帯文系甕には蔵小路西を代表とする在来系の第一群（8・9・11・12）とタテチョウを標識とする変容系の第二群（14～17）がある。

第一群（在来系）は砲弾型一条甕（8・9・11）と屈曲型一条甕（12）がある。幅2cmほどの粘土紐を内傾接合して成形し，外面を丁寧なナデで仕上げる。口縁部突帯の位置はAとBで，刻目はつけるものとつけないものがある。口唇部刻目は認められない。

第二群（変容系）は，17からみる限り幅4cm前後の粘土帯を接合したものである。屈曲型一条甕は外面を刷毛目で調整し，胴部に屈曲の痕跡を残す（14，15）。砲弾型一条甕には16と17があり，刷毛目調整を施す。突帯文系土器の割合は遺跡によってさまざまである。次章でその意味と背景について考える。

タテチョウや西川津では大陸系磨製石器や木製農工具を完備した本格的な水稲農耕が始まっているので，農耕民化が完了し社会が大きく転換したことがわかる。

九州北部の板付Ⅰ新式，Ⅱa式，瀬戸内の津島Ⅰ式，高知の田村Ⅰ式に併行する。

(4) 弥生Ⅰ期後半

北講武氏元に代表される時期である。在来系の第三群（在地系—10・13）と，外来系の第四群がある。後者には，瀬戸内甕に近い19・20，九州東部の下城式甕に近い21・22がある。19・20は口縁

部の突帯というよりすでに瀬戸内甕に特徴的な平坦口縁の域に達している。器面調整はナデが基本で，刷毛目は用いられない。この段階には，突帯文系甕の割合が1割以下で遠賀川系甕単純の組成に近いタテチョウや西川津と，突帯文系土器の割合が高い北講武氏元の二つがみられるのが出雲平野の特徴である。

なおこれ以降，出雲平野の突帯文系土器は急減し，瀬戸内甕がわずかにみられるにすぎない。

九州北部の板付Ⅱb式，瀬戸内の津島Ⅱ式に併行する。

(5) 出雲平野の突帯文系土器の特徴

弥生早期古段階に瀬戸内と同時に出現した出雲平野の突帯文土器は，器種構成，器面調整など基本的に共通する。早期新段階に九州北部の早期水稲農耕文化が波及し，夜臼系壺や甕の平底化が起こるが，屈曲型二条甕を受け入れないなど，瀬戸内や中国山地とは異なる対応も認められた。刻目は口縁部突帯上やまれに口唇部に刻むのみで，瀬戸内にみられるように口頸部や胴部にはあまり施さない点や，屈曲型一条甕のなかに出雲にしかみられない形態のものも存在するなど独自色ももっている。

出雲平野の突帯文系土器のもっとも大きな特徴は，遺跡によってⅠ期甕組成が異なることである。今のところ，中・四国では出雲平野だけで確認できる。遺跡によって甕組成が異なることは，すでに福岡平野や河内でも指摘されてきた。しかし中・四国では，岡山平野で可能性が指摘されていたものの決定的な証拠はまだ少なかった［藤尾 1991b］。

出雲平野で遺跡ごとに甕組成が異なることを確認できたことは，この現象が西日本全体で一般的だった可能性をますます高めることとなった。そこで，出雲平野に甕組成を異にする遺跡がみられる意味とその背景について検証する。

❹……出雲平野における弥生文化成立期の諸問題

1　出雲平野の集団関係

Ⅰ期甕組成比率の違いは，使用していた人びとの出自の違いを反映したもの，という考え方がある。

甕組成の9割以上が遠賀川系である集団と逆に9割以上が突帯文系である集団が，生態的地位（ニッチェ）を異にする離れたところに集落を構え，相互交流していたというもので，弥生Ⅰ期の大阪平野を舞台とした住み分け説［中西 1984］［春成 1990］はこの考えにたったものである。

現在では，1991年当時に資料が不足していた福岡平野や岡山平野でも資料が充実してきており，出自差ではなく，狩猟採集民系か農耕民系かなどの生業を異にする集団の住み分けの可能性が指摘されはじめている［藤尾 1999］［小林 1998］。そこで出雲平野の場合，Ⅰ期甕組成の違いが何を意味しているのか検討する。

図8は，復元した出雲平野の古地形上に弥生時代の遺跡をおとしたものである。出雲平野の西端には日本海に沿って古砂丘があり，その背面（東側）には，「神門水海」とよばれるラグーン，そしてそれに注ぎ込む河川沿いの丘陵や段丘上に弥生時代の遺跡がのる。まさに九州北部玄界灘沿岸

地域の初期農耕集落が立地する地形的条件と共通した様相をみせる。

当該期の出雲平野西部の集落分布を大局的にみると，嶋田川の上流から中国山地にいだかれた板屋Ⅲ遺跡，山地と平野の境界付近にある三田谷Ⅰ遺跡，蔵小路西遺跡，砂丘上の古浦遺跡や原山遺跡となる。また出雲平野東部では宍道湖沿いに分布する西川津・タテチョウ遺跡，石台遺跡，日本海からややうちに入った小平野に所在する北講武氏元遺跡がある。

(1) 出雲平野西部

まず嶋田川の上流・中流・下流に位置する板屋Ⅲ遺跡，三田谷Ⅰ遺跡，蔵小路西遺跡など出雲平野西部の状況を概観する。

板屋Ⅲ遺跡［角田 1998］

縄文晩期最終末の谷尻式から弥生早期新段階の沢田式までの土器を出土する遺跡で，中心は谷尻式と早期古段階の前池式にある。谷尻式には長崎県山ノ寺遺跡B地点にみられるような二条直接刻目文土器や，口縁内の内側から外側に向かって，貫通しない孔列文をもつ擬孔列文土器が多量に出土している。

前池式の甕組成は，粗製深鉢と屈曲型一条甕を中心とする。これらの土器は遺跡が中国山地に所在するということもあって，広島県帝釈峡遺跡群の突帯文土器と基本的に同じ特徴をもっている。したがって，これから述べる下流域や海岸部の突帯文土器とは別の土器分布圏に属する。

この遺跡の生業を知るうえで重要なのが大量に出土した小振りの打製石斧である。後述する三田谷Ⅰ遺跡や蔵小路西遺跡から出土する巨大な打製石斧に比べるときわめて小さい。本遺跡では縄文晩期の土器の胎土中からシコクビエのプラント・オパールが見つかっていることを参考にすると，三瓶山の噴出した火山灰をもとに形成されたやわらかい土壌に対しては小ぶりで軽い打製石斧が有効だったことを示している。

このように，板屋Ⅲ遺跡は，生業の一部に雑穀栽培を加えていた人びとのムラであったと考えられる。

三田谷Ⅰ遺跡

ダム建設予定地内を発掘したところ，三つの地区から突帯文土器が出土した。谷奥の地点ほど古く，平野に近いほど新しくなる。いずれも突帯文土器単純段階に属する。

最も古いG区は，晩期末の谷尻式を主体とする。次は早期新段階の突帯文土器を出土する93-94年調査区である。屈曲型一条甕が主体でわずかに古手の砲弾型一条甕がともなう。この地区から出土する打製石斧はきわめて大きく，とくに石鍬の形をした打製石斧が大量に出土している。扇状地という砂礫の多い土地に適応した頑丈な打製石斧が必要とされた結果と考えられる。また穂摘具状の半円形の剥片も出土していて，畠作をおこなっていた可能性が指摘されている。

もっとも新しいのが，蔵小路西と同じ第一群の突帯文系土器を出土したB地区で，平野に面したところに立地している。蔵小路西と同じく遠賀川系土器は出土していないが，突帯文系土器のなかには，佐賀県唐津平野に特有の唐津型の屈曲型二条甕［藤尾 1991a］や，Ⅰ期中段階に比定される瀬戸内甕が出土している。

以上のように，板屋Ⅲ，三田谷Ⅰ，蔵小路西で打製石斧，穂摘具状の剥片，雑穀のプラント・オパールがみつかっていることから，何らかの形で雑穀栽培を生業の一部にとりこんだ人びとのムラ

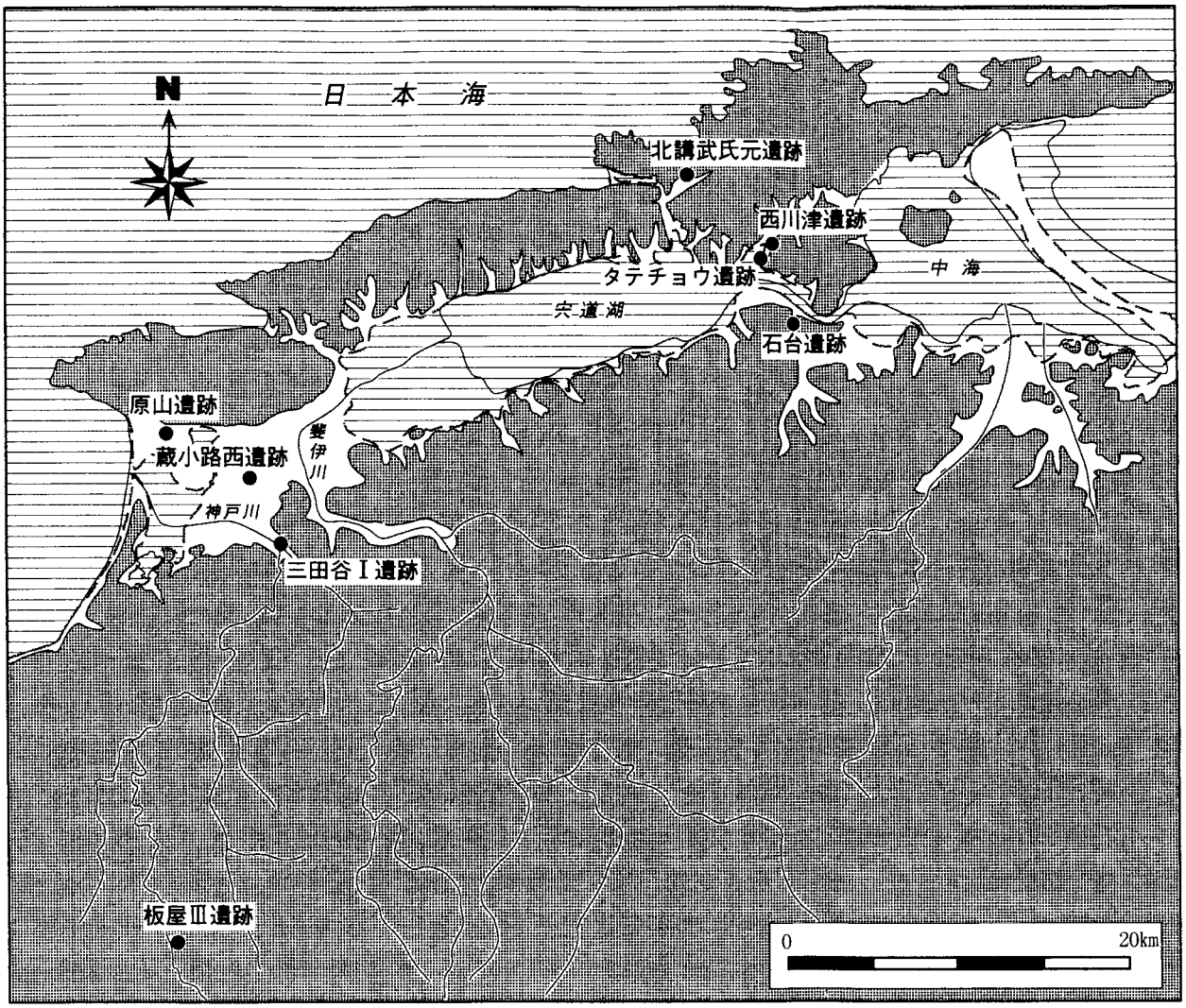

図8　出雲平野部の遺跡分布（蔵小路西遺跡の報告書より転載）

古地理の説明　宍道湖湖底ボーリングの検討などから，出雲平野が拡大して島根半島と地続きになり，現地形の原形が形作られたのは，縄文時代後期から弥生時代までの間と推定される。上図では，当時の推定地形を破線で示している。（白抜き部は沖積地，網かけ部は山地および台地）

であったと考えてよい。ただ出雲平野西部では三田谷Ⅰ遺跡B地区や蔵小路西のように遠賀川系土器が出現している時期にもかかわらず遠賀川系土器がともなわない遺跡しか見つかっていない。したがって弥生Ⅰ期になっても本格的な水田稲作をおこなっていない人びとの集落であった可能性を示すものとして注目される。

(2) 出雲平野東部

この地域ではⅠ期前葉の遠賀川系土器と混在して突帯文系土器が出土するタテチョウ・西川津遺跡，後半の遠賀川系土器と混在して突帯文系土器が出土する北講武氏元遺跡がある。ただ包含層からの出土であり，共伴というには難しい状況である。これらの遺跡の人びとが本格的な水稲農耕をおこなっていたことは，大陸系磨製石器や木製農具などの農工具類，高比率の壺からみて確実である。

タテチョウや西川津では縄文早期から早期突帯文土器まで連綿と土器が出土していることからみて，縄文時代からこの地で集落を営んでいた在来の人びとのムラと考えられる。遺跡に近接する宍道湖の湖面水位は，後・晩期から海退が始まり，弥生開始期には西川津とタテチョウの間に達し，ついにはタテチョウの下流まで後退したといわれている［大西 1990］。したがってⅠ期前葉に在来の人びとが本格的な水稲農耕をおこなうようになった頃の遺跡は，水際にかなり近かったと考えられる。

それに対して北講武氏元はⅠ期中頃に造られた農耕集落である。この周辺には縄文後期の佐太講武貝塚などがあるので，古くから在来の人びとの生活の場であったことは確実である。したがって在来の人びとが同じエリア内の水稲農耕に適した土地に占地し，本格的な水稲農耕に取り組むようになったと考えることもできる。この遺跡から出土した口縁下端凸状甕[6]（図2-10）と呼ばれる土器は，出雲在来の人が遠賀川系甕を作るために工夫したあとがよく残っているため，在来の人びとが含まれていたことは確実である。

しかし彼らの生活はそれほど安定したものではなかった。灌漑用水路と想定されている溝が洪水層によって覆われていることや，現在でもちょっとした雨で水田が泥をかぶることから，排水の悪い，常に洪水の危険にさらされていた土地と考えられる。石器も蔵石の割合がかなり高いなど，水稲栽培への傾斜はそれほど高くなかった可能性もある。

このように出雲東部には縄文後・晩期以来，この地を生活の場としている在来の人びとがⅠ期前葉から後半にかけて農耕民化してできた集落が存在した。しかしその後の展開は一様ではなかったことがわかる。

2 出雲平野と福岡平野の比較 ——弥生文化成立地域と波及地域との違い——

これまでの検討の結果，縄文時代以来，狩猟採集を生活の基本とする出雲平野在来の狩猟採集民は，本格的な水稲農耕へ取り組むにあたって，さまざまな対応をみせた。

Ⅰ期前葉に縄文以来の場所で本格的な水稲農耕を開始し，農耕社会を形成していく西川津遺跡やタテチョウ遺跡，Ⅰ期後半にそれまで利用していなかった土地に進出して本格的な水稲農耕を始めた北講武氏元遺跡，そして弥生Ⅰ期になっても水稲農耕へ傾斜せず，そのあと継続しない蔵小路西遺跡や三田谷Ⅰ遺跡B地区である。

表3　農耕民化の型の分類表

	板付型	那珂型	四箇型
集落の継続度	新規に集落を造る	新規に集落を造る	前代より継続
集団構成	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民
農耕化の世代	第一世代	第一世代	第二世代
遠賀川古式創造の有無	○	×	×
Ⅰ期甕組成	Ⅱ型	Ⅳ型	Ⅳ型

こうした出雲平野における農耕民化過程を鮮明にするために，日本列島でもっとも早く農耕集団が出現した福岡平野と比較してみよう。福岡平野には，水稲農耕民の出現から農耕社会の成立までの過程を異にする三つの農耕民化過程があることを確認している［藤尾1999］。板付型，那珂型，四箇型と名付けた農耕民化過程は，縄文後・晩期との継続度，農耕集団の出自別構成，農耕民化する時期，板付Ⅰ古式の創造の有無，Ⅰ期甕組成［藤尾1991b］などの点で異なっている（表3）。

板付型と那珂型は，在来の狩猟採集民出身者と水稲農耕民出身者（渡来人を含む）から構成される点で共通している。早期初頭になると縄文後・晩期から狩猟採集民が住んでいなかった土地へ進出して，本格的な水稲農耕を始める，いわば第一世代の新規開拓型ともいえる農耕民集団である。

Ⅰ期初頭になると，社会の質的な再編成をへて環壕集落をつくり，拠点集落としての位置を固める点では共通するものの，板付Ⅰ古式と呼ばれる土器を創り出し製作する板付型と板付Ⅰ古式を創造しない那珂型に分かれる。したがって板付型では早期突帯文土器（夜臼Ⅱb式）と板付Ⅰ古式が共伴するⅡ型の甕組成となるが，那珂型は早期突帯文土器単純から板付型単純（板付Ⅰ新式）へとうつるⅣ型の甕組成となる。

板付型はその後も発展を続け，Ⅰ期末には青銅器を保有する有力者を生み出す。それに対して板付Ⅰ古式を生み出さない那珂型の展開は多様である。那珂遺跡のようにⅠ期初頭でその場所での営みを停止し，どこかへ移動する集団もあれば，雀居遺跡のように営み続ける集団もある。

四箇型は，在来の狩猟採集民が縄文以来の本拠地でⅠ期前葉以降に本格的な水稲農耕を開始し農耕民化する型で，いわば第二世代の継続型農耕民集団である。板付Ⅰ古式創造とは無関係なので，那珂型と同じⅣ型の甕組成となる。

この福岡平野でみた農耕民化過程とⅠ期甕組成の関係を参考に，出雲平野であつかった遺跡を整理したのが表4である。

ここでは，板付Ⅰ古式創造の有無を，Ⅰ期前葉の遠賀川系土器（遠賀川古式）をもつ集団と読み替えている。またⅠ期前葉から本格的な水稲農耕が始まる岡山の津島遺跡南池地区と高知の田村遺跡，佐賀県吉野ヶ里遺跡も参考として加えた。

集落の継続度をみると，出雲平野の新規開拓型は北講武氏元だけで，それ以外は継続型である。出雲平野以外の津島南池，田村，吉野ヶ里は新規開拓型である。

集団構成は，在来の狩猟採集民出身者と外来の農耕民出身者から構成された可能性のあるものがほとんどで，在来系単独と考えられるのは蔵小路西や三田谷Ⅰなど水稲農耕に傾斜しない集団だけと考えている。

表4　西日本のⅠ期甕組成と農耕民化過程の対応表

	タテチョウ・西川津	北講武氏元	蔵小路西	津島南池	田　村	吉野ヶ里
集落の継続度	前代より継続	新規に集落を造る	前代より継続	新規に集落を造る	新規に集落を造る	新規に集落を造る
集団構成	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民・農耕民	狩猟採集民・農耕民
農耕化の世代	第一世代	第二世代	農耕化しない	第一世代	第一世代	第一世代
板付Ⅰ古式創造の有無	○	×	×	○	○	×
Ⅰ期甕組成	Ⅱ　型	Ⅱ　型	Ⅰ　型	Ⅲ　型	Ⅱ　型	Ⅰ　型

タテチョウ・西川津はⅠ期前葉にこの地ではもっとも早く農耕民化する第一世代，北講武氏元はⅠ期後半に農耕民化する第二世代である。津島南池，田村，吉野ヶ里は第一世代である。

第一世代に属す遺跡ではすべて遠賀川系を創造している。ただし吉野ヶ里だけは板付系土器をほとんどもたない。これは有明海沿岸地域の特徴である。

北講武氏元，タテチョウ，西川津は突帯文系土器と遠賀川系甕が共伴[7]するⅡ型[8]，蔵小路西，三田谷Ⅰ，吉野ヶ里は遠賀川系や板付系土器が伴わないⅠ型の甕組成である。

表3と4を対照するとわかるように，福岡平野で確認した三つの型と完全に対応する集団は板付型に属す田村だけで，あとは甕組成，農耕民化の時期，継続度などの点で少しづつ異なっている。たとえば，北講武氏元は板付型とおなじ新規開拓型だが第二世代という点で異なる。タテチョウと西川津は，四箇型と同じ継続型だが第一世代という点で異なる。津島と吉野ヶ里は那珂型と同じ新規開拓型だが甕組成が異なるといった具合である。

このようなずれが生じた理由の中でもっとも可能性が高いと考えられるのは，これらの遺跡が弥生文化の波及した地域にあることである。もしこの仮定が正しいとすればこのずれこそが波及地域における弥生文化成立期の特徴として認識できよう。そこで，この考えが妥当かどうか，弥生文化の波及とそれを受けた各地での農耕民化過程という視点で再整理してみる。

Ⅰ期前葉（板付Ⅰ新式，津島Ⅰa式）

Ⅰ期初頭（板付Ⅰ古式）に福岡平野で質的な転換を遂げた弥生文化は，従来の板付Ⅰ式の後半期に周辺地域へ拡散する。

福岡平野では四箇型とした第二世代の農耕民化がおき，出雲平野，岡山平野，高知平野，佐賀平野では第一世代の農耕民化が起こる。拡散は遠賀川を越えて中・四国方面へと向かう東進と佐賀以南への南進という二つの方向がみられるため分けて説明する。

中・四国への東進は，Ⅰ期前葉段階では出雲，中部瀬戸内，高知平野まで確実に及んでいる。縄文以来の拠点集落が農耕民化する継続型が出雲平野で，新規開拓型が岡山平野や高知平野でみられた。突帯文系土器と遠賀川系土器との共伴は，継続，新規開拓型とわず起こっている。

各地の遠賀川系土器は，出雲平野が響灘沿岸[9]，岡山平野が西部瀬戸内，高知平野が九州北部の遠賀川系土器と密接な関係をうかがうことができるため，それぞれの地域の地理的・歴史的伝統に外来の影響が加わって各地固有の遠賀川系土器が生まれたことを意味している。

南進では新規開拓型の農耕民化過程を吉野ヶ里で確認できる。遠賀川系甕をほとんどもたない。鹿児島県高橋貝塚も新規開拓型の農耕民化過程をみせるが，遠賀川系甕の比率は吉野ヶ里よりやや高い程度である。

このようにⅠ期前葉の文化拡散は，出雲平野にだけ継続型の農耕民化を引き起こしたという結果となった。

Ⅰ期中ごろ～（板付Ⅱa～Ⅱb式，津島Ⅰb・Ⅱ式）後半

拡散した地域で第二世代の農耕民化が起こる。東進ルート上で確認できたのは出雲平野の北講武氏元遺跡と岡山平野の津島岡大であった。北講武氏元は新規開拓型，津島岡大は継続型である。突帯文系甕と遠賀川系甕との共伴は，北講武氏元でのみ認められた。なお，南進ルート上では詳細がわかる例はなかった。

このようにみてくると，福岡平野に第一世代の継続型の農耕民化がみられない理由は，在来の狩猟採集民が独自に農耕民化することがなかったことを示すと考えられ，外からの移住者が弥生文化創造の鍵を握っていた可能性のあることを予想させる。それに対して弥生文化が拡散した地域では，第一世代，第二世代とも継続型と，新規開拓型の農耕民化過程がみられる。これら各地で起こる農耕民化に外からの移住者が関与していたかどうかを考古学的に判断する指標として取り上げられてきたのが，突帯文系土器と遠賀川系甕との共伴現象である。次はこの問題を取り上げる。

3　突帯文系甕共伴の意味

弥生化の過程でみられる共伴現象には，玄界灘沿岸地域にみられる早期突帯文土器と板付Ⅰ古式甕の共伴と，西日本で新規開拓型，継続型を問わずみられる突帯文系土器と遠賀川系甕との共伴がある。同じ共伴だが，早期突帯文土器と突帯文系甕との共伴では意味の違いがある。

筆者はかつて板付遺跡と田村遺跡にみられるこのような違いについて，「しかし完全に弥生化した突帯文土器（本稿の変容系を指す―筆者註）と遠賀川式土器の共伴の意味は，早期突帯文土器と遠賀川式が共伴する板付遺跡と質的に異なる。系譜を違える土器の使い分けでは説明できないこの地域独自の事情を反映したものであろう。」［藤尾 1991a：229］と発言したが，具体的な説明をおこなわなかったために，出原恵三の批判を浴びている［出原 1994］。そこでその意味を明らかにしておきたい。

異系統の土器が伴う場合，考古学的にはこれまで三つの解釈が示されてきた。様式差（時間差），集団差，機能差である。弥生Ⅰ期初頭における夜臼式と板付Ⅰ古式との共伴現象の場合は，これまで様式差とみる九州の研究者と集団差とみる春成［春成 1967］，機能差とみる岡本勇［岡本 1967］との論争が特に有名である。

筆者は玄界灘沿岸地域における早期突帯文土器と板付Ⅰ古式との共伴は，住み分け論的な集団差と機能差の面からとらえられることを示したことがある［横山・藤尾 1986］［藤尾 1991b］。それは次のような理由からであった。

夜臼・板付Ⅰ古式共伴期以前の玄界灘沿岸における甕組成をみると，砲弾型一条甕が二条甕より圧倒的に多いのに対し（約3：1），共伴期になると砲弾型一条甕は激減し，かわりにほとんど比率に変化が認められない二条甕と板付Ⅰ古式甕が1：1で共伴する。これこそ，砲弾型一条甕のもっ

ていた機能が板付Ⅰ式甕に取って代わられた反面，屈曲型二条甕がもっていた機能はそのまま弥生Ⅰ期に引き継がれたことを意味すると考えた。

すなわちこの弥生化していない二条甕と板付Ⅰ古式甕との共伴こそ，水稲農耕開始期の煮炊き用土器の使い分けを示すのではないかと考えたのである。つまり，外蓋を使い屈曲する胴部をもつ二条甕はドングリや根茎類を中心とする縄文以来の食料を対象とした加熱処理や調理に用い，内蓋を使う板付甕は，コメを対象とした調理に用いたと仮定した。さらにこの二つの甕が共伴することは，蓋の使い方という機能面を異にする縄文的調理形態と弥生的調理形態がまだ共存している段階にあったことを意味し，その背景には出身母体の違いが関係していることを予測したのである。(10)

そういった視点で田村遺跡や西川津・タテチョウ遺跡における共伴現象をみると，変容系の突帯文系甕の評価が大きな意味をもってくる。板付の早期突帯文土器と西日本の突帯文系甕では弥生化の有無と器種が異なるからである。すなわち田村の突帯文系甕は，破片資料が多いので砲弾型一条甕か屈曲型一条甕かを決めるのはなかなか難しいものの，砲弾型一条甕が多いという印象であった(図7－4～6)。出雲平野でもやはり破片資料が多いが，大形の屈曲一条甕が目立つ。いずれも弥生化している。

田村や出雲平野の弥生化した突帯文系甕と板付の早期突帯文甕では，前者のほうが型式学的に新しいことは明らかなので，出原のいうように田村，西川津・タテチョウ遺跡での共伴現象は，弥生的調理形態の完成を意味するものとみてよいだろう［出原 1994］(11)。

逆に，玄界灘沿岸における共伴現象は，弥生的調理形態の完成以前にみられる蓋の使い方を異にする縄文的調理形態と弥生的調理形態の共存を示すと考える。(12)

次にⅠ期後半～末にみられる九州東部の下城式甕や瀬戸内甕と遠賀川系甕との共伴である。Ⅰ期甕組成のⅢ型に相当する。

出雲平野は高知平野とともに瀬戸内甕が盛行しない地域で，甕組成の中に占める割合は1割以下であった。

瀬戸内甕は，西部瀬戸内の早期突帯文土器に系譜をもとめる説［梅木 1992・1994］が梅木健一によって説かれるようになり，筆者が1991年に示した突帯文系甕系譜説［藤尾 1991a］にたって，直接の故地をもとめる研究が進みつつある。瀬戸内甕が瀬戸内の早期突帯文土器に系譜をもつとすれば，瀬戸内甕は瀬戸内地域の在来系突帯文系土器ととらえることができる。(13)

突帯文系土器が早期に継続して調理用土器の中心的役割を果たすということは，突帯文系甕でなければ果たせない機能があったから，という視点で考察したのが，板付Ⅰ古式と共伴する福岡平野の夜臼式であった。検討の結果，この地域では突帯文系土器と板付系土器を使い分けていたと推測するにいたったことは先に述べたとおりである。

それに対し弥生Ⅰ期後半～末の中部瀬戸内には，福岡平野とは異なる背景があった。参考になるのがこの地域におけるサヌカイト製の打製石器である。

讃岐金山産のサヌカイトを石材とする打製石器は，中部瀬戸内で弥生Ⅰ期以降も盛行し，収穫具はサヌカイト製の石鎌や石庖丁が占める。磨製石庖丁や石鎌が広く使われる九州や近畿とは対照的である。おそらく縄文以来の石材供給・石器の生産体制を堅持する集団間・地域内では，本格的な水稲農耕をおこなうにあたっても，旧来の石材供給体制が崩壊することなく存続したために，九州

北部や近畿のような磨製石庖丁への転換が難しく，縄文以来の打製石庖丁を使い続けたと考えられる。

一方，大陸系磨製石器中心の石器組成へと転換した玄界灘沿岸地域では，それまでの打製石鏃を中心とする打製石器用石材の入手は続いたものの，あらたに大陸系磨製石器用の石材を産出し流通させる体制が必要とされ用意された可能性がある。のちの今山産太型蛤刃石斧や立岩の石庖丁につながるものである。

弥生初期の大陸系磨製石器の石材が朝鮮無文土器文化の石材と共通していることが，新たな石材に固執する姿勢へとつながるものであろう。

こうしたことから，石材を通じて伝統的な集団間の結びつきを堅持したような地域では突帯文系土器が存続したのに対し，それにあまりとらわれない地域では遠賀川系甕への転換が進んだ可能性は高い。

河内のⅠ期前葉にみられる金山産サヌカイト製石器の比率増加は，河内の伝統的な二上山サヌカイトの流通体制の一時的な崩壊，もしくはそれを必要としない集団の出現を意味する。金山産サヌカイトの比率が高い遺跡の甕組成が遠賀川系甕単純のⅣ型を示すのはこの仮説の妥当性を示唆するものである。

4　出雲平野における遠賀川系土器の出現について

出雲平野では，弥生Ⅰ期のはじまりと同時に遠賀川系土器が出現した。型式学的にみて津島Ⅰ式や田村Ⅰ式など，中・四国のもっとも古い段階に位置づけられているものと同じものであった。最後に出雲平野におけるこれらの成立過程に関する見通しを述べて，稿を終えることにする。

出雲平野で遠賀川系土器が成立するための型式学的な条件を知るには，近年活発な瀬戸内を舞台とした遠賀川系土器成立論が参考になる。

津島Ⅰ式や田村Ⅰ式がもつ複数の属性がどのように出現するのか，その過程を復元することによって，出雲平野におけるこの問題を考えるためのヒントが得られよう。そこで，まず遠賀川系土器瀬戸内起源説がよりどころとする属性をみてみよう。平井勝は，津島遺跡南池地点出土土器を分析し，津島Ⅰ式甕について次のように述べている［平井 1995］。

津島Ⅰ式の甕には遠賀川系甕と突帯文系甕があるが，後者はわずか数点しかなく，実質的に遠賀川系甕単純の組成である。平井はわずかしかない突帯文系甕（図7－8）を早期突帯文土器として位置づけ，あくまでもⅠ期に残存したにすぎないと考える。

津島Ⅰ式の遠賀川系甕は，口縁部に刻目だけを施文するもの（平井分類のF，図7－9）と，口縁部の下方に段をもつ甕（平井分類のH）を基本的なセットとする。豆谷和之のいう口縁下端凸状甕（平井分類のE）は約4％で少ない。これらはタテチョウや西川津でも出土している。

津島Ⅰ式の壺には，口縁部外側に外傾接合に伴う段をもつ壺（平井分類のB）と，段をもたない壺（平井分類のA）があり，この二つで壺の約75％を占める。

ところが，彼らが遠賀川系土器の祖型と考える，朝鮮半島の中期無文土器と津島Ⅰ式をつなぐ甕は岡山平野でも出雲平野でもまだ出土していない。玄界灘沿岸地域に分布する板付祖型甕に相当する土器はまだみつかってないのである。

属性レベルでみてみると津島Ⅰ式にみられる外傾接合に伴う段（図3-12，5-1）や，外傾接合による成形技法（図4-10，5-1）は，今のところこの地の早期突帯文土器とも型式学的につながらない。このように在来の早期突帯文土器，朝鮮無文土器，西部瀬戸内の遠賀川系土器の三者間に型式学的な断絶と共通性の双方が認められる現状では，祖型を特定の地域に絞り込むことはできない。

ましてや遠賀川系甕が瀬戸内や出雲で，朝鮮無文土器を直接の祖型として独自に創造されたと断定する証拠もない。むしろ現状では，出雲平野や岡山平野の地理的・歴史的伝統を基盤に，西方の遠賀川式土器の影響を受けながら，中・四国の各地で遠賀川系甕が成立すると考えるのがもっとも妥当である。出雲平野の場合は，かねてから指摘されているように，遠賀川下流地域や響灘沿岸地域との関係が強くうかがえるので，これらの地域の影響がもっとも強かったと考えられる。

❺……結 語

1　出雲平野には早期突帯文土器の流れをくむ突帯文系土器がⅠ期後半（中段階）まで存続する。

2　突帯文系土器には，在来の早期突帯文土器の伝統を引く在来系，早期突帯文土器が遠賀川系甕の影響を受けて成立する変容系，瀬戸内や豊後との関係が認められる外来系がある。

3　遠賀川系土器との出方は，遺跡によってさまざまである。在来系単純の組成を示す蔵小路西遺跡，三田谷Ⅰ遺跡。変容系，在来系，外来系が遠賀川系と伴出するタテチョウ遺跡，在来系と外来系と遠賀川系が伴出する西川津遺跡，北講武氏元遺跡である。このうち変容系が出土するのは今のところタテチョウ遺跡だけである。

4　出雲平野の水稲農耕集落は，在来の集団がⅠ期前葉に農耕民化したと考えられる第一世代の継続型と，Ⅰ期後半に農耕民化した第二世代の新規開拓型が認められた。これは岡山平野，高知平野にも共通してみられる農耕民化過程である。

5　Ⅰ期前葉には，農耕民化しなかった蔵小路西遺跡や三田谷Ⅰ遺跡が存在することを確認したが，これらはそれ以降，存続しない。したがってこれ以降，穀・雑穀栽培に専業化しない集落は出雲平野から姿を消した可能性がある。

6　出雲の遠賀川系土器は，岡山平野や田村遺跡と同じく，西方地域の影響を受けて，独自の地理的・歴史的伝統のなかから，急激に生み出されたものと考えておくのが，現状ではもっとも説明しやすい。

おわりに

本稿は，1998年度に出雲市，松江市でおこなった弥生開始期の土器の調査をもとに書き起こしたものである。出雲平野ほどⅠ期前葉の突帯文系土器が存在する地域は，中・四国ではあまり例がない。西日本における弥生文化の成立過程を理解する一助となれば幸いである。

本稿を草するにあたり，下記の方々には資料の実見などご便宜をおはかりいただいた。末筆ながら謝意を表したいと思います。赤澤秀則氏（鹿島町教育委員会），足立克巳・間野大丞氏（島根県

埋蔵文化財調査センター)，出原恵三氏（高知県教育委員会)，間壁忠彦氏（倉敷考古館）

(1998年12月20日校了)

本稿は，平成10年度文部省科学研究費補助金特定領域研究(1)「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」（課題番号09208103）の成果の一部である。

註

(1)――筆者は，突帯文土器単純期から弥生時代と考えているので［藤尾 1988]，山内清男によって縄文晩期最終末の土器として設定された突帯文土器を弥生早期突帯文土器とよぶ。遠賀川系土器出現以降に存在する突帯文土器を弥生Ⅰ期突帯文系土器として早期突帯文土器とは区別する。

(2)――3は，砲弾型一条甕と考えているが，後述する図2-7と口縁部の特徴が似ていること，体部の傾きからみて屈曲型の可能性も残る。

(3)――藤尾 1991aで，中山貝塚出土の瀬戸内甕を沈線の数や口縁部突帯の形などをもとに二つに分け，弥生Ⅰ期後半（Ⅰ期中段階）に位置づけている。

(4)――柳浦は，早期突帯文土器を古相と新相にわけ，さらに突帯文土器の最終末として北講武氏元をあげている。氏によれば北講武氏元はⅠ期中段階に併行するとされている。

(5)――柳浦は明言していないが，突帯文土器最終末と言っているため，このように理解した。

(6)――口縁下に刷毛目の工具や板状工具の木口を押し当て，口縁部の外反を強調するための技法で，弥生早期の玄界灘沿岸地域からⅠ期の西日本各地に分布する。豆谷和之が「遠賀川系土器瀬戸内起源説」を説明する際，祖型甕として注目する土器である［豆谷 1995]。

(7)――共伴とは，遠賀川系甕と突帯文系甕が5：5から7：3の比率で伴う場合に限定している。したがって9：1の場合は，混在と見なしている。

(8)――タテチョウや西川津における遠賀川系甕と突帯文系土器との組成比は算出されていない。実見した印象では，遠賀川系甕7割に対して，3割程度の突帯文系土器であった。

(9)――下條信行によれば，西川津遺跡から出土したⅠ期の大陸系磨製石器のうち，農具（石鎌，石庖丁）は，遠賀川系土器と同じく，遠賀川～響灘沿岸との深い親縁性が認められるという。それに対し武器や祭器（柳葉形磨製石鏃，細形石剣，石矛，陶塤)，漁具（結合式釣針，アワビオコシ，九州型石錘）は，九州北部からの直接的な伝播をみせるという。時期は必ずしも弥生開始期に限定されないが，文化拡散にみられる二重構造性が何を意味するのか，今後の課題である。

(10)――この機能差とみる考えは，最近，佐藤由起夫によって批判されている［佐藤 1999]。佐藤は加熱型アク抜き処理の頻度が高い，東日本縄文文化にみられる大形の深鉢と中・小形の深鉢との使い分けが，弥生早期初頭の玄界灘沿岸地方にも適用できるという前提にたったうえで，筆者のいう使い分けが成立するのは大形の深鉢が多い菜畑遺跡だけで，板付など福岡平野の諸遺跡には適用できないと説く。

確かに，後・晩期の東日本縄文文化と弥生早期の玄界灘沿岸地域が生態的な条件や調理・煮沸形態においてまったく同じ基盤をもつという佐藤の前提が正しければ，傾聴すべき意見である。しかしその前提の検証はおこなわれていない。加熱型アク抜き処理が必要なトチノキなどの生息状況がまったく異なり，しかも本格的な水稲農耕をおこなっている玄界灘沿岸地域における堅果類への依存度と，東日本後・晩期におけるこれらの堅果類に対する依存度が同じとはとうてい考えられない。

(11)――出原は，弥生化していない早期突帯文甕と板付Ⅰ古式甕との共伴こそ，後進的なあり方を示すものとして，弥生化した突帯文系甕と伴う津島Ⅰ式や田村Ⅰ式が板付Ⅰ式より古いことを示す根拠の一つとしている。しかし，論理的には最初に型式的な先後関係をおさえたうえで，評価を下すのが本来なので，解釈が根拠となっている出原の立論は成り立たないと考えている。

(12)――この時期の蓋形土器にみられるススの付き方が根拠となっている。蓋は口縁端部より内側にかけて1～2cmの幅でススが付着する場合が多い。これは甕の口縁端部より蓋の口縁部が外側に1～2cmはみ出したときに起こる現象である。すなわち外蓋として用いられていたことを示す。

次に突帯文土器の口縁部におけるススの付き方をみると，口唇部の中央付近を境に外側にススが付いていることを確認できる。これは甕の口径とほぼ同じ口径の蓋が

用いられていたことを示す。板付甕のススは，口縁部外面と，口縁部内面に1～2cmほどの幅でついていることが観察できる。これは蓋が内蓋として甕の口縁部内に落とし込まれた状態で使われていたことを意味する。

以上，蓋，突帯文甕，板付甕の口縁部にみられるススの付き方から，九州北部の突帯文甕は外蓋で，板付甕は落とし蓋（内蓋）として用いられたと推測できる［山崎 1980］。

このような蓋の使い方を異にする調理法の違いとは何か。調理する対象物と，調理法の違いが考えられる。これこそ先述した縄文的調理形態と弥生的調理形態の違いの実態である。

(13)――最近，Ⅰ期前葉に属する下城式甕プロトタイプといえる突帯文系甕が大分市下志村遺跡で出土した［高橋 1996］。この遺跡でも早期突帯文土器と下城式甕とをつなぐ中間型式が出土しているので，下城式甕や瀬戸内甕が早期突帯文土器に系譜をもつことはもはや確定したといえよう。

参考文献

赤澤　秀則編　1989：北講武氏元遺跡．講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4．鹿島町教育委員会．
内田　律雄　1996：島根県の石器組成の変遷．農耕開始期の石器組成1，210-211．国立歴史民俗博物館資料調査報告書7．
内田　律雄編　1990：朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3）．島根県土木部河川課・島根県教育委員会．
梅木　謙一　1992：朝美澤遺跡2次調査出土の弥生Ⅰ期土器．朝美澤遺跡・辻田遺跡．松山市文化財調査報告書29．
1994：西部瀬戸内地方の弥生時代Ⅰ期土器．牟田裕二君追悼論集．
大西　郁夫　1990：西川津遺跡（海崎地区）―弥生時代の植物遺存体―．朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3），143-159，島根県土木部河川課・島根県教育委員会．
岡本　勇　1967：弥生文化の成立．日本の考古学Ⅲ―弥生時代―，424-441，河出書房．
角田　徳幸　1998：板屋Ⅲ遺跡．志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5．
小林　青樹　1998：弥生時代早・前期の津島岡大遺跡とその周辺．津島岡大遺跡10―第9次調査―，117-124，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター．
佐藤由起夫　1999：縄文弥生移行期の土器と石器．雄山閣出版．
下條　信行　1990：島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州．朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3），325-340，島根県土木部河川課・島根県教育委員会．
高橋　徹　1996：大分平野周辺の前期―中期の弥生式土器について．曲遺跡，45-58，九州横断道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書，大分市教育委員会．
出原　恵三　1994：四国西南部における弥生文化の成立．文化財学論集，229-240，奈良大学．
中西　靖人　1984：前期弥生ムラの2つのタイプ．縄紋から弥生へ，120-126，帝塚山考古学研究所．
春成　秀爾　1967：弥生時代はいかにしてはじまったか―弥生式土器の南朝鮮起源をめぐって―．考古学研究73，5-24．
1990：弥生時代の始まり．東京大学出版会．
平井　勝　1995：岡山平野における遠賀川系土器の出現―津島遺跡南池地点出土土器の再検討―．古代吉備17，20-33．
藤尾慎一郎　1988：縄文から弥生へ―水田稲作の開始か定着か―．日本民族・文化の生成，437-452，永井昌文教授退官記念論文集．六興出版．
1991a：水稲農耕と突帯文土器．日本における初期弥生文化の成立，187-270，文献出版．
1991b：水稲農耕開始期の地域性．考古学研究38-2，30-54．
1999：福岡平野における弥生文化の成立過程―狩猟採集民と農耕民の集団関係―．国立歴史民俗博物館研究報告77，51-84．
松本　岩雄　1992：出雲・隠岐地域．弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―．木耳社．
豆谷　和之　1995：Ⅰ期弥生土器出現．古代99．48-73．早稲田大学．
山崎　純男　1980：弥生文化成立期における土器の編年的研究―板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合―．鏡山猛先生古稀記念古文化論攷，117-192．
柳浦　俊一　1990：縄文土器．朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ，6-11．島根県土木部河川課・島根県教育委員会．
1994：島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要―飯石郡頓原町森遺跡出土土器を中心に―．島根考

古学会会誌11，25-38.
横山浩一・藤尾慎一郎　1986：宇木汲田遺跡1986年度出土の土器について．九州文化史研究所紀要31，59-101.

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

(1999年5月7日　審査終了受理)

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol. 83 March 2000

The Formation of the Yayoi Culture in Izumo Plain

FUJIO Shin'ichiro

In western part of Japan, the Initial Yayoi period is marked with *Tottaimon* pottery, and the Early Yayoi period is marked with Itazuke-Ongagawa origin pottery. *Tottaimon* pottery continued being used well in some areas even after the Initial Yayoi period but it has not been clear how it existed in Izumo area, the Early Yayoi. Recently, newly discovered *Tottaimon* pottery in Kurashoji-Nishi site in Izumo city gives us an important suggestion to consider this matter, because it isn't accompanied with Ongagawa origin pottery. Thus, this paper examines how the Yayoi culture was established in this region, with the clues of excavating situation of *Tottaimon* pottery and Ongagawa origin pottery from various sites.

Tottaimon pottery in Izumo, at the Early Yayoi is classified into several categories; the native type originated from *Tottaimon* pottery at the Initial Yayoi, the hybrid type transformed with the influence of Ongagawa origin pottery, and the adopted type strongly related with Setouchi and Bungo province. Examining the numbers of each type excavated from sites, we can conclude that the types of pottery have close relation to the changing process to paddy field cultivation.

From Tatecho and Nishi-Kawazu sites, we find all types of *Tottaimon* pottery and Ongagawa origin pottery. These two sites were base and center for thousands of years since the Jomon period, and were agriculturized at the same places at the beginning of the first half of the Early Yayoi period (Itazuke I New type stage). From Kitakôbu-Ujimoto site, we find all *Tottaimon* type pottery and Ongagawa origin pottery except hybrid type. This place also changed into paddy field cultivation at the same base since the Jomon period at the latter half of the Early Yayoi period. From Kurashoji-Nishi site, only the native type of *Tottaimon* pottery is dug out. This place is a typical example which would not be agriculturized and the community became extinct.

For the time being, the transformation into agriculture at the same base since the Jomon period is unique to Izumo area. For example, Itazuke (Fukuoka pref.), Tsushima-Minamiike (Okayama pref.), Tamura (Kochi pref.), at all these places, agriculturization didn't occur at the same base of the former communities. Thus the agriculturization of Tatecho and Nishi-Kawazu

were the earliest good examples that the center communities from the Jomon period took part in quick agriculturization in Izumo area as the Yayoi culture spread.